コロシコロサレコロスカヒ

立花　潮美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コロシコロサレコロスカヒ

【Ｎコード】
Ｎ１２８２ＢＡ

【作者名】
立花　潮美

【あらすじ】
殺したい、と願う少女。
殺されたい、と願う少年。
そんなふたりの出会いは、必然だったのかもしれない。陰と陽、白と黒。ふたりはおたがいに正反対であったがゆえに、その心をすこしずつ重ねていく。
ところが、そんなふたりの周囲で事件が起こりはじめる。その余波が、すこしずつふたりの周囲にも押し寄せてきて……。
高校生の少女と少年が織りなす、シンプルなショートストーリー。

プロローグ

わたしはひとを殺したいの。

〈　どうしても？

ええ、そう。どうしてもよ。この手で、この体で、確実に殺さないといけないの。

〈　どうして？　何のために殺すの？

自分を生かすために、殺したいの。

〈　ああ、それは良い理由だね。

ありがとう。

〈　他のやりかたでは、うまくいかない？

だめだわ。無理ね。

〈他の手段を、確かめてみた？

ええ、それはもう、ひと通りね。

〈　本当に？

わたしだって、バカじゃないつもりよ。色々と探してみたし、試してもみたわ。

＞　たとえば、どんな？　教えてもらっても、いいのかな。
話してあげても良いけど、なぜ聞きたいの？
＞　ぼくにとって、それはとても大事なことだから。物事の過程は重視されるべきだ。
なんで？　そんなに過程が大切かしら？　結論よりも？
＞　だって、死という結論は同じでも、殺されかたの過程は数多くあるよね？
ああ、わかったわ。あなたは、どう殺されるか、を気にしているのね。
＞うん、その通り。わかってもらえて嬉しいよ。
なあるほど、それならＯＫよ。教えてあげても良いわ。でも、ここじゃイヤ。
＞ううんと、他の人に知られてしまうのが、いやなのかな。
わたしは心の秘密を、これから死ぬ人以外に見せるつもりはないの。
＞　了解した。じゃあ、捨てアドを教えるから、それにメールをもらえるかな？
良いけど、この掲示板にアドレスを公開するわけでしょ？

知らないひとが、いたずらでメールを送ってきたらどうするの？
わたしだって、わかるかしら？

＞わかるよ。だって、ぼくは殺されたいのだから。

ああ、素敵なお答えね。わたし、ドキドキしてきちゃった。

第一章　ころしたいの――――（１）

すでに、残されている時間は少ない。頃志摩潰煉（ころしま かれん）は、そう確信していた。

今こうして、黒板の文字をノートに黙々と書き写している間にも、『それ』はガン細胞のように彼女の身体を蝕みつつある。

これは、失われていく感覚だろうか？

それとも、壊されていく感覚だろうか？

いや、違う。本当に怖いのは、そんな感覚ではない。もっとも忌むべきことは、気づかないこと。知らないうちに、こっそりと置き換えられていること。

毎朝、鏡を見ている自分には、少しずつ起こっている変化はわからない。

『しばらく見ない間に、潰煉ちゃんはすっかり大人になったね』

久しぶりに会う親戚から、そんな言葉をかけられたとき、潰煉はすさまじいまでの戦慄を覚える。自覚がないまま『大人』という別の生き物に、潰煉はなりつつある。気がつかない間に、いちばん大切なものが汚されつつある。

すぐに止めなくてはいけない。一分一秒を争う事態になるかもしれないのだ。だからこそ、殺さなくてはいけない。たしかに、その行為は許されないのだろう。

「別に、構わないけど」

潰煉は、あっさりと口にした。

その様子を見た友人の已足内心（いたりだい こころ）が、ショートカットの髪をわずかに揺らしながら、潰煉よりも頭ひとつぶん高い長身をかがめたまま、いそいそといった感じで自分の椅子ごと近づくと、胸に抱え込んでいたお弁当箱を、潰煉の机の上に置く。

潰煉は、かるく首をかしげてから訊いた。「心、どうしたの？お昼休みに、お弁当を一緒に食べるのは、いつものことじゃない。

わざわざ訊かなくても良いのに」
「それはココロのセリフだよぉ」心が、上目遣いで潰煉の顔をそっと見つめた。「だって、カレンちゃん、今日ちょっと変じゃなぁい？」
潰煉も、鞄から自分のお弁当箱を取り出す。「そう？　別に何もないけど」
「なら、いいけどぉ……。あ、そうそう、今日の放課後ね、つきあってくれない？　あのね、駅の向こうに、新しい小物のお店ができたみたいなの。だからね、ココロは行ってみたいな。かぁいいの、いっぱぁいあるみたいだよ」
潰煉は、ご飯を飲み込んでから言った。「今日はダメかな」
「えー、どうしてぇ？」心が、たこさんウインナーをもぐもぐしながら訊く。
無表情で潰煉は答える。「どうしても、よ」
「あ、カレンちゃん、やっぱり変なのぉ」心はまだもぐもぐしている。
「そんなに変かしら？　そういう風に言われると、あんまりうれしくない」
「え、でもぉ、なんかウキウキしてるように見えるの。なにかいいことあったぁ？」
気づかれないように、よどみなく箸を動かしてから、潰煉は嘘をついた。「何も」
心は何か言いたそうな顔をしていたが、二個目のたこさんウインナーに箸を伸ばすと、体を丸めて再び上目遣いに潰煉を見ている。心は、潰煉よりも縦に長い体型をしているので、その体勢が潰煉にはひどく窮屈に見えた。
短めの髪といい、スレンダーな体型といい、外見はボーイッシュな感じなのに、心の挙動や言動はひどく女の子っぽい。腕にはめている時計も女児向けのキャラクターもので、どう考えても似合わないのに、心は外そうとしない。口では祖母の形見だから、などと言

っているが、あやしいものだ、と潰煉は思っていた。
「どうしても、今日はダメぇ？」心が、捨てられた子犬のような目で友人を見つめる。
視線を、窓から見える空の方にそらして、潰煉は答えた。「どうしてもよ。ひとりじゃダメ？　ひとりで行くと、何かまずいの？」
「ほら、だってブッソウだしぃ」心が目をうるうるさせている。
潰煉は目を細めた。「ブッソウ？　物騒なの？　そういう場所にあるお店なの？」
「うーん、そうじゃなくて。ほら、サツジンハンが居るからぁ」
殺人犯、という言葉に、はじめて潰煉が箸を止めた。「なんで、急にそんなことを？」
「だって、例の連続殺人事件が起こってるの、陰惨市内だよ？　近くだよ？　ココロ、ひとりは怖いなぁ」心がおびえる子犬のような顔をしている。
たしかに陰惨市内では、心の言う通り、いささか奇妙な連続殺人事件が発生していた。
殺人は市内の各所で行われ、そして死体がそのまま遺棄されている。
どうやら殺害方法はすべて同じらしいのだが、被害者に共通項がないので、通り魔的な犯行ではないか、と新聞やニュースでは報道されている。加えて死体の損傷が激しいこともあり、猟奇的な要素もあるのではないか、とも噂されている。
潰煉の記憶が間違いでなければ、一週間ほど前にも、とある公園に死体がひとつ転がっていたはずで、新聞やテレビは大騒ぎになったものだった。
だが、心はちょっと大袈裟ではないか、と潰煉は感じていた。
「近く、っていうけどさ。事件が起こってるのは、陰惨市の、けっこう広い範囲でしょ？　事件の現場になってる場所は、この高校がある堕胎町からは、ずいぶん離れてたはずだわ」
「あ、意外なの。カレンちゃん、ずいぶんと詳しいんだね」

余計なことを言ってしまった、と潰煉は内心で舌打ちをした。殺人事件に興味を持っていることを、友人の心には知られたくなかったからだ。

「ごめん、でもやっぱり、今日はひとりで行ってね」

すこし強引に、話を戻す。大切な約束があることを悟られないよう、潰煉は最大限に表情をコントロールした。

心は子供っぽいくせに、妙なところで勘の良さを見せることがある。時々、根拠もないのに的を射た指摘をしたり、潰煉の頭の内側を容赦なく覗き込んだりしてくる。そういうことには慣れていたはずだが、今日はその状況は避けたかった。

潰煉はしばらくの間、黙々とお弁当を食べ続けた。

「ぷうぅ」心が、顔の下半分を思い切りふくらませて抗議した。

第一章　ころしたいの――――（２）

最後の授業が終わるやいなや、頃志摩潰煉は鞄を抱えて外へ飛び出した。

あたりに注意を配りながら駅まで歩くと、いつもとは違う方向の電車に乗る。誰にも見られたくなかったから、潰煉は歩いているとき以上に、周囲を警戒した。

隣町の駅で隠れるように電車を降りると、すべるような足取りで目的地へと向かう。

陰惨市内でも有数の繁華街である駅前は、他校のものとおぼしき学生服の姿であふれかえっていたが、潰煉の通う高校の指定はありふれたブレザーだったから、まるで木を森に隠すようなものだった。相手が学校帰り、制服のままでの面会を望んだのも、もっともなことだ、と潰煉は納得した。へたに私服でうろうろするよりも、よほど目立たないだろう。

やがて潰煉は、その足をとめた。右手に持っているプリントアウトした地図と、自分の周囲にある風景とを、しばらく交互にながめた後で、ひとつ大きくうなずく。

そして意を決して、目の前にある喫茶店へと入っていった。

約束の喫茶店に入った潰煉は、店内をさりげなく見渡した。そこも学校帰りの制服姿であふれていたが、駅前の雑踏とはあきらかに雰囲気がちがっている。

二人用の席が多く存在していて、ほぼすべてに男女のペアが座っていた。席と席のあいだには、観葉植物が置いてある。

店そのものの落ち着いた雰囲気といい、おそらくはカップル御用達の店なのだろう。内緒話をするには、もってこいな感じだった。

そんな中で、ゆるやかに動いていた潰煉の視線が、ぴたりと止まる。

潰煉の目は、驚くほど自然に、ひとりの男子生徒に向けられてい

た。
　どこにでもいるような、普通の少年。中肉中背、髪型も地味。雰囲気も大人しい感じだったが、その目だけがひどく透き通っていた。自分の意思で歩くのではない、そんな不思議な感覚をおぼえつつ、潰煉の足は滑らかに動いて、その男子生徒のいるテーブルの前で止まった。
「こんにちは」
　その男子生徒が、ゆっくりと顔を上げた。その表情に驚いた様子は見られない。
　少年が潰煉を見つめていたのは、そんなに長い時間ではなかったが、目の前にいる少女が、掲示板で言葉をかわした相手だ、と確信したようである。
「やあ、こんにちは」男子生徒が、静かに答える。
「頃志摩潰煉です。はじめまして、の方が良かった？」
「どちらでも。でも、せっかくだから、はじめまして、と言うよ」
おっとりとした口調で男子生徒が付け加えた。「贄望削途です。とりあえず、まず座って」
　言われた通り、潰煉は削途の前に座った。二人に挟まれたテーブルは店の窓際にあり、そこからは表を歩く人並みが見わたせた。ありがたいことに、外からは店内の様子がわかりにくいようになっている。
　近づいてきたウエイトレスに、潰煉はレモンティーを注文した。せっかく透き通っている琥珀色の液体を、ミルクで濁らせたくなかったからだ。一方の削途は、すでに半分なくなりかけているブラックのコーヒーを口に運んでいる。
「もしかして、待った？　五分遅れちゃったし」
「いや、すこし先にきただけ。それに、待つのには慣れているから」
静かな口調で応じると、削途が穏やかな笑みを浮かべた。「頃志摩さんとは違って、ぼくの方は待たねばならないから。ある意味、ぼくの人生そのものが、ずっと待っているようなものだよ」

うなずいて、潰煉も笑みを返す。「潰煉、って呼んで。みんなそう呼ぶから」
「では、そうさせてもらうよ。その代わり、ぼくも削途って呼んでほしい」
潰煉は、あたりさわりのない言葉を選んだ。「なかなかに、良い感じのお店ね」
「気に入ってもらえて、良かったよ。本当は、もっと人気のないところにしようか、とも考えたんだ。　ただ、それだと女性である潰煉さんに、無用な警戒心を抱かせてしまうかもしれない、と思ったものでね」削途が、声も表情も柔らかい感じで言った。
小さくうなずいた潰煉の視線は、削途の左手の側、つまり窓側に向けられた。テーブルの上に、地味な装丁の小さな冊子が乗っかっている。
興味津々で、潰煉は訊く。「それ、スケッチブック？」
「うん、たまに絵を描いているんだ。友人に勧められてね。いまも描いて待っていた」
ひとこと断ってから、潰煉は削途が描いていた絵をのぞきこんだ。中央に描かれた直線が、テーブルの横にある窓から見える道路であることは、潰煉にもすぐにわかった。
現実と違うのは、大型のトラックが歩道に突っ込んで、大勢の通行人を踏み潰していることだった。もちろんその多くは学生服姿で、絵の中で見るも無残な姿を晒していた。おそらくは血を表しているのだろう、ペンの黒いインクが道路いっぱいに広がっている。ところどころ、インクが大きな塊になっているのは、飛び散った肉片を表現しているのかもしれない。
潰煉は正直な感想を述べた。「素敵な絵ね」
「ありがとう」削途が恥ずかしそうに微笑む。
数瞬ののち、潰煉は小首をかしげた。「でも、ちょっと意外。そういう趣味もある人？」
「え？　……ああ、たぶん、勘違いをしているね」今度は、削途が

にっこりと笑った。「ぼくが居るのは、このトラックの下の方だよ」
潰煉は二度まばたきをした。「なあるほど。もしかして、そういうのが理想？」
「うん、そうなんだ」
「すり潰されて、死にたいの？」もちろん周囲に人が居るから、潰煉はささやくような口調になる。「こなごなに、跡形もなく？」
「ちがう」削途が静かに首を振る。「死体のあり方に興味は無い。それは結論だから」
その言い方で、潰煉にも削途の意思が読み取れた。
「あなたは、事故に遭いたいのね。巻き込まれて殺される、そんな死を望んでる？」
「うん、その通り。きわめて理想的な死に方だね」
潰煉はすこしだけ、削途に顔を近づけた。「正直なところ、どうやって話を進めようか、迷ってたのだけど、こんな自然にやりとりができて驚いてるの」
「まあ、それは、掲示板である程度はお互いのことを知っていたからね」
「素晴らしいわ。時間を浪費せずに済むから」潰煉は微笑む。「まず、わたしの方から訊いても良いかしら？」
「良いよ。レディ・ファーストだからね」
「どうして死にたいの？」
潰煉は単刀直入に訊いた。婉曲さのかけらもないその質問の仕方は、潰煉に余裕がないことの表れでもあったが、もちろん潰煉自身は、そのことに気づいている。
「自分の人生を、シャットダウンしたいからだよ」はっきりと、しっかりとした口調で、削途がどこまでも冷静に応じた。
迷いのない削途の答えを聞いて、潰煉は嬉しくなった。「続けて」
「簡単に言うと、ぼくの人生には、快楽よりも苦痛の方が多い、と理解できたから。だから、生きていても仕方がない、って思えるんだ」

まるで、ひとごとのような口調で削途が続けた。
「生きることは、つらく、苦しいことだ。喜びや楽しみは、少ししかない。そのごくわずかな快楽で、苦痛をごまかしながら過ごしているだけだ。ぼくたちの世代は、将来に希望はない、と思う。未来には不幸しかない以上、いまここで自分の人生をやめても、構わないと思うんだ」
潰煉は大きくうなずいた。
「その考え方に近いものは、なんとなくわかるわ。自分をとりまく環境が、どんどん悪くなってるのを、肌で感じるから。じつは今がピークで、あとは坂道を転げ落ちてくだけ、そんな感覚がわたしにもあるもの」
「ピークでさえ、この有様だからね。将来は本当にろくでもないよ」
「ええ、その通り。未来に希望なんてない。それにこんな風に感じてる以上、きっとピークは中学の頃だったのかもしれない」
潰煉は天をかるくあおぐと、その顔を削途へと向きなおした。「ああ、あなたのお話を聞いてみて、もうひとつの質問が我慢できなくなってきちゃった」
「遠慮は要らないよ」削途が笑った。「ぼくの方は、いくらでも時間があるから」
「じゃあ訊くけど、どうして自殺をしないの？」
潰煉は、真正面から削途の透き通った目を見すえた。
「削途さん、話を聞く限りでは、あなたはすでに死ぬ覚悟はできてるんでしょ？　自分を自分で殺すのが、もっとも手っ取り早い、と思うんだけど」
予想された質問だったのだろう、削途の返答はよどみなかった。
「うん。それはもちろんそうだ。潰煉さんの言うことは正しい。でも、ぼくは自殺をすることで周りの人に迷惑をかけたくないんだ。これでも親や友達が、一応いることにはいるからね」
削途が再びコーヒーを口に含んだ。その液体は、何も入れなくても黒く濁っている。潰煉の視線にうながされるようにして、削途が

言葉を続けた。
「自殺をしたら、どうなると思う？　きっと、親や友達は、責任を感じてしまう、と思うね。親であれば『育て方が良くなかったかもしれない』とか『接し方が悪かったせいにちがいない』とか、そんなふうに、苦しんでしまうかもしれない」
削途がティースプーンをくるくると回した。
「あるいは友達であれば『なぜ自分に相談をしてくれなかったのか』とか『どうして気づいてあげられなかったのか』とか、そんなふうに、悩んでしまうかもしれない」
削途の右手がスプーンを回し続ける。
「ほかにも色々と考えられるけど、あげればキリがないかな。つまり、ぼくが自殺をすることで、彼らは自分自身を責めてしまうかもしれないわけだ。そうやって、無実の他人に罪悪感を覚えさせるのは、ちょっと、はた迷惑だと思うんだ」
削途が、いったん言葉を切ると、表情を少しあらためた。
「もちろんこれには、多分にぼくの『悲観的』観測も含まれているけど。ぼくが自殺をして、『さっさと死んでくれてせいせいした！』とか『あいつがいなくなってバンザイだ！』とか、そんなふうに考えてくれるのであれば、それはきわめて『楽観的』だね」
潰煉は、ふむふむ、とうなずいた。
「……つまり、自殺という行為をすることが、周囲に影響を及ぼす、と？」
「うん、そう思う。少なくとも、周囲に居る人たちにとっては、良い意味の影響はないよね。そしてそれは――」
削途の視線が、道路を走るトラックへと向けられた。走り去るトラックに、どこかなごり惜しそうな視線を向けながら、ぼそり、という感じで、削途がつぶやいた。
「――美しくは、ない。汚らしい人生を歩んでいる以上は、せめて死ぬときくらいは綺麗でありたい、と願うよ」
口を閉ざしたとき、削途の瞳は、ひときわ澄みきっていた。

潰煉は、その瞳を覗き込むようにして応じる。
「なあるほど。だから、事故死というのが、あなたにとっての理想の姿なのね」
「その通りだよ。事故で死ぬことができれば、親や友達は責任を感じずに済むから。そういう意味では、人災よりも天災の方がより好ましいね。死の責任を、ほかの誰にも押し付けようのない状況が良い」
削途が、両手をひろげて、少しおどけてみせた。
「極端なことを言えば、空から隕石が降ってきて直撃死、なんて最高かもしれない。親や友達は、隕石を責めたり告発したりはしないだろう？　周囲にいる人たちは、それだけぼくの死を容易に受け入れることができるわけだね」
潰煉は再びうなずいた。
「なんとなく、わかったわ。あなたの考え方」
「それは……ちょっとずるいかな。ぼくのことばかり、話しているような気がするよ」

第一章　ころしたいの――――（　３　）

ウエイトレスがレモンティーを運んできたので、ふたりの会話は中断した。
頃志摩潰煉は、琥珀色に透き通った紅茶をひとくち飲んだ。
レモンのかすかな酸味が、潰煉の感覚を刺激する。贄望削途の視線が、自分の方に向けられるのを待ってから、潰煉は言葉をつむいだ。
「わたしの方は、すごくシンプルなの。結論から言ってしまえば、自分を変えるキッカケ、が欲しかっただけ」
「それは、自分を生かすキッカケ、という意味？」
「ううん、どちらかと言えば、死なないようにするためのキッカケ。なんて言えば良いのか、言葉で説明するのが難しいわ」
潰煉は目をつぶると、慎重に言葉を選び始めた。
「……ええと、わたしはね、ゆるやかに死んでくのがイヤなのよ。いえ、ちがうわ。死ぬのが怖いんじゃない。わたしがいちばん怖いのは、自分の心が、汚されてしまうこと。穢される、いいえ、つくり変えられる、改悪される、と言った方が良いかもしれない」
潰煉は目を閉じたまま、かるく顔をしかめた。
「……汚れた精神をもったまま生きてくのは、それはある意味で精神的に死んでることと同義だから、そういう感覚では死ぬのを恐れてる、と言ってもよいのかもしれないわ」
潰煉は小さく何度も首を振った。「ああ、うまく説明できない。自分に腹が立つわ」
「落ち着いて。ぼくは待っているからね」削途の笑みがどこまでも優しい。
潰煉は目を開くと、両手を胸に当てて訴えた。
「……ねえ、わかってほしいの。わたしが感じてるのは、強い危機感なの。せっぱつまってるのよ。小学校や中学校のときに感じてた

違和感とか、納得いかない気持ちとか、そういったものが、高校生になったいま、薄れてきてるわ。ずっとおかしいと思ってたもの、絶対に許せないと感じてたものを、いまでは、仕方がないものだ、そういうものだ、って考えて、なんとなく受け入れてしまってる。受け入れることを、当然のことのように感じることとさえあるわ」

削途が、おっとりとした調子で応じた。

「きみが言いたいことの趣旨は、理解できているつもりだよ。自分自身の個性とか、自分特有の感性とか、そういうものが失われていくこと、それを恐れているんだね」

「そう、なのよ。時がたつにつれて、どんどん、自分自身というものが無くなってくみたい。それは汚れていってるのかもしれないし、穢されていってるのかもしれない。それが、大人になる、ということなのかもしれないけど、そんなのはイヤなの。このままでは、わたしは普通の大人の仲間入りをしてしまう。そんな自分自身がとても恐ろしくてたまらないの。ううん、なんて言えば良いのかしら……」

「お茶を、ひとくち飲んでごらん」削途が、みずからもコーヒーカップを持ち上げて口へと運んだ。「妥協すること、甘受することが、受け入れられないみたいだね」

潰煉は大きくうなずいたあとで、小さく手を振った。

「あ、でも勘違いしないでね。他人の正しい意見を聞くのは、別に構わないのよ。ただ、洗脳させられるのは、イヤなの。それにいちばん怖いのは、わたし自身がそれを人のせいにしようとしてることなのよ。苦痛を感じてるのは『学校のシステムが悪い』とか『家庭環境が悪い』とか、何かに押し付けて、自分自身の責任から逃れようとしてる……」

「それはつまり、他人に責任を押し付ける、他責の考えということ？」

「そう、そうよ！」

声が大きくなってしまったのに気づいて、あわてて潰煉は声をひ

そめた。
「まさにその通り。そういう考え方をする人間にだけはなりたくないの。絶対にイヤ。そんなことになるくらいなら、死んだ方がまだマシよ」
「周りに、そういう他責の考え方をする人が居るんだね。たとえば、親とか？」
　潰煉は、早く小さく息を吸い込んだ。
「さっきから……薄々とは感じてたのだけれど、削途さん、あなた頭の良い人よね」
「そんなこと、ないよ」削途が静かに首を振る。
　潰煉の顔は、すこし赤くなっていた。
「嘘。ちがうわ。受け答えを聞いてればわかるもの。あなた、わたしの言いたいこと、瞬時にまとめてみせてるじゃないの。わたしなんか『殺したい理由』を訊かれる、ってわかってて、昨日の夜から、一生懸命どうやって説明するか考えてたのに、このざまだもの」
「ぼくが自分のことをうまく説明できたのは、潰煉さんの訊き方がじょうずだったからだし、ぼくの抱えている理由がきわめてバカげていたから、かもしれないよ」
潰煉はため息混じりに主張した。
「あなたがバカなら、わたしは大バカ、になっちゃうじゃないの。贅望削途は頭が良い、ってことで良いんじゃなくて？　それにあなたの制服、梅毒高校のものでしょ？　梅毒高校なんていったら、このあたりでは有名な進学校じゃない」
「進学校かどうかなんて、意味のないことだよ。少なくとも、人の生とか死にはあまり関連のない、どうでも良いことじゃないかなあ」
　潰煉に軽くにらまれた削途が、苦笑まじりに言うと、手のひらを顔の前にさしだした。
「さあ、気にしないで、先を続けてほしいな」
「……どこまでお話しましたっけ？」
「他責の考え方はイヤだ、というところまで」

「そう、そうよ、そうだったわね。わたしは、ゆるやかに汚染されてくこと、知らないうちに穢されてくことを恐れたわ。そこで、なんとかするためには、自分自身を変えるしかない、と思ったの。何かをキッカケにして、生まれ変わるしかない、と思ったわ」

ふたたび削途にうながされて、潰煉は紅茶に口をつけると、乾いた唇をうるおした。

「自分を変えたい、そのキッカケがほしい。そのキッカケは、普通の経験ではダメだったわ。非日常的で衝撃的な体験をして、一気に自分の殻を突き破ってくしかない、と思ったの。それを求めてどんどんと進んでいって、究極的に、それは禁忌に踏み込むことではないか、という結論にたどりついたの。そしてその答えのひとつが、人を殺す行為だった」

潰煉の赤い舌が、ちろちろと動いて、みずからの下唇をなめた。

「知らないうちにつくられた『理性という殻』を壊して、内側に秘められた本能を解き放ち、本当の自分自身を体現する。それこそが必要なことであり、殺人行為はそのきっかけとして、まさに相応しい行為だ、と思ったわ」

「うん、うん」削途が繰り返しうなずいた。「殺したい、という潰煉さんの結論は理解できた、と思うよ。ありがとう。……じゃあ今度は、そこに至るまでの過程が聞きたいな」

潰煉は、満足そうに微笑んだ。

そのあとで、形の良いあごに手を当てたまま、潰煉は首をかるくひねった。「掲示板でもそうだったけど、削途さんは、結論よりも過程にこだわるのね」

「まあ、それはそうだね。理由を説明した方が良いかな？」削途がまじめな顔で訊いた。

潰煉は、ふたたび微笑んだ。「ぜひ、お願いするわ」

「うん、了解したよ。理由はふたつあげられるね」削途が胸の前で腕を組むと、手の指を一本立てた。「まずひとつ目は、結論よりも過程の方が重要なのは、当然のことだからだよ。ためしに具体例を

あげてみようか。たとえば『人を殺してしまった』という結論があるとしよう」
削途が、ゆっくりと、落ち着いた口調で続ける。
「このとき『完全に偶発的な事故で死なせてしまった』のと『ついカッとなってうっかり殺してしまった』のと『はじめから計画して相手を殺した』のとでは、三つとも結論は同じでも、ずいぶん状況がちがうよね？　殺意の有無についてもそうだし、罪の重さについても、ちがいが出てくると思う。これは、結論よりも過程の方が重要である、ということを、如実に表している事例だ、と言えると思う」
ちいさくうなずいている潰煉に、うなずきを返した削途が、二本目の指を立てた。
「ふたつ目は、結論だけを追い求めて、地獄を見てしまった知り合いがいるからだね」
潰煉のからだが、すこし前のめりになる。「地獄？　くわしく聞かせて」
「別に潰煉さんに当てつけるつもりはないから、怒らないで聞いてほしいのだけど……」
削途の左手が、コーヒーカップを持ち上げる。
「むかし、死を望んだ少年がいた。彼はぼくと同じように、殺してくれる相手を探していて、そして見つけた。彼は、自分の望みを叶えようとした。でも実際には、その相手は殺す気などはまったくない、ただのサディストだった」
沈黙を保っている潰煉を見て、削途がコーヒーをひとくちすすった。
「彼が発見されたとき、両手両足は、すでに使い物にならなくなっていた。両目もつぶされていた。たぶん、今でも彼は病院にいる、と思うよ、芋虫のような姿でね。歯もすべて折られていたから、舌を噛んで自殺することもできなかったみたいだ」
削途がカップの中にある、黒い液体の底の方を覗き込むようにし

た。
「……まあ、かわいそうだけど、彼自身にも責任はある。彼は、相手の過程を調べておくべきだった、ぼくはそう思っている。動機と目的だけではなく、その途中経過をきちんと確認していれば、相手が、ただの変態的なサディストであることは、分かったはずなんだ」
そこで言葉を切ると、削途がさぐるような視線を、潰煉の顔に向けてきた。
「最初にことわったけど、潰煉さんに当てつけるつもりはないからね。すこししか話していないけど、潰煉さんはそんな人ではないと感じている。まちがないなく、きちんと人間を殺すことのできる覚悟を持った人だ。それは確信に近いものがあるよ」
「うれしいわ。ありがとう」
「どういたしまして」
潰煉が表情をゆるめてみせたので、削途は安心したようである。カップを傾けて、すっかり冷めてしまったコーヒーの、最後の残滓を飲み干した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1282ba/

コロシコロサレコロスカヒ

2012年1月5日22時50分発行